

## 現代への警鐘としてのリトル・ファーザー・タイム

辻 建一

トマス・ハーディの「日陰者ジュード」(以下「ジュード」と略す)に登場するジュードの子供、リトル・ファーザー・タイム(以下FTと略す)について、その異様な性格造形も恐ろしい行為も、蓋然性が乏しいのではないか?さらに、スーについて、物語の後半の劇的な変節はストーリー展開から説得力をやや欠くのではないか?という、二つの問題はよく問われるところである。ごく常識的なとらえ方として、家庭の苦境についてのスーのセリフを真に受けた、敏感すぎる少年による発作的な子供たちの抹殺、そしてそれにより母性に衝撃を受けたスーの、因習に対する戦いの放棄、という読みがあるだろう。しかしそのような説明だけでは、スーの変節の極端さとFTのキャラクターの不気味さの解釈としては物足りないことは否めない。そこで本稿では、「ジュード」というテキスト内だけで解釈しようとする以外のやり方を採り、この問題について新たな解釈の可能性を切り開いてみたい。つまり、ハーディ小説を年代順に並べ、その展開を追っていくことによって何か見えてくるものがないかを追究していくことにする。

「遙か狂乱の群れを離れて」「帰郷」「カスターブリッジの市長」「ダーバヴィル家のテス」(以下「テス」と略す)「ジュード」の主要5作品を並べて見て、まず、FTとスーが担っていたテーマを「遙か狂乱の群れを離れて」まで遡って発見し、そのテーマがその後の作品でどういう風に差異を生じていったのかを検討することから始めてみる。「遙か狂乱の群れを離れて」と「ジュード」は、色々な意味で対照的な作品のように見える。まずこの二つの小説は、ハーディの小説家としての経歴を、正反対の意味で画したものである。「遙か狂乱の群れを離れて」は、批評家たちから認められ作家としての自信を確固たるものにした作品、一方「ジュード」の方は非難轟々のうちについて小説執筆を断念する引き金になった作品であることは、周知の事実であろう。内容的にも、「遙か狂乱の群れを離れて」は農村の自然を舞台とする牧歌的な物語、「ジュード」の方は殺風景に崩れかかったカレッジ群が主な舞台で、近代の人間の自己疎外が表現されている。さらに、「遙か狂乱の群れを離れて」はヒロインがヒーローと結ばれるハッピーエンド、「ジュード」の方は、ヒーローは惨めな死を迎えヒロインは肉体的に嫌悪している相手を受け入れて終わるというアンチクライマックス。こういう一見対照的な作品であるが、しかし「ジュード」が提起する問題の解釈において、「遙か狂乱の群れを離れて」にあえて注目したいのは、この小説にスーとFTのかかえている問題のいわば原型とでもいうべきものが伺われるからである。「遙か狂乱の群れを離れて」の中では、バスシバが、共同体の人たちが無難と考えるポールドウッドとの結婚を嫌がり、自

分の内的欲求に従って奔放なトロイとの関係を追求するので、共同体の道德規準や価値観に反旗を翻すという点で、スーとの共通点が見られる。

バスシバとスーは共に、最後には妥協を強いられるが、しかしその妥協の厳しさの違いは、誠実な男性を受け入れる二人のエンディングの描写を見れば一目瞭然であろう。バスシバとオークの最後の結婚式の日が、ハッピーエンディングの割にはどこか寂しげな雰囲気漂っていることは時々指摘されてきた。しかし生理的に嫌悪している年輩の男性相手との肉体関係を受け入れるスーのエンディングのおぞましきとは比べようもない。

それでは今度は、FTという不気味なキャラクターの原形を「遙か狂乱の群れを離れて」から探すとしたら誰になるのだろうか？それは、バスシバへの異常な恋愛感情から狂気じみた行動に駆られ、最後殺人まで犯してしまうボールドウッドだと思われる。FTの子供殺しと自殺を狂気の行動と言っているのなら、この二人を繋ぐキータムとして、「狂気」「殺人」「自殺」などがあげられるだろう。ボールドウッドは自殺しないが、ボールドウッドのキャラクター作りが、ハーディの親友ホレス・モウルの自殺が影響しているらしいというテキスト外の伝記的事実もここでは考慮にいれない。

仮にボールドウッド抜きで「遙か狂乱の群れを離れて」を要約してみると、未熟なヒロインの試練と成長、そして最後の順当な花婿選びという、オースティンの小説にもつながるような幾分コンベンショナルな話にすら見えてくるだろう。当初レズリー・スティープンソンに渡したストーリーにはなかったというこのキャラクターは、妄想的な恋愛感情や常軌を逸した行動という、その後のハーディ小説で様々な変奏を見ることになる特徴を有しており、ある意味でハーディ独自の世界の誕生を告げる人物とも言えるかもしれない。とはいえ、その恋心や嫉妬に駆られた殺人というの、いわば扇情小説の枠内に収まるもので、FTの犯した行動に比べれば、はるかに蓋然性も高いものである。

FTの狂気、そしてスーの妥協は、それぞれボールドウッドの狂気とバスシバの妥協に比べ、はるかにグロテスクになっている。なぜ、最初の頃はまだ穏当だった狂気や異常行動のモチーフ、そしてオリジナリティを目指した人の妥協、というモチーフが、最後に極端にグロテスク化されてしまったのか？そこに至るまでの過程を検討してみたい。

まず、バスシバからスーへ繋がる、共同体の規範・道徳を逸脱してオリジナルな生き方を目指すキャラクターの系譜を並べると、バスシバ（「遙か狂乱の群れを離れて」）、ユースティシア（「帰郷」）、ヘンチャード（「カスターブリッジの市長」）、エンジェル（とテス）（「テス」）、スー（とジュード）（「ジュード」）ということになるだろう。彼らは皆、過剰な情熱に導かれて、あるいは人とは異なる価値観に基づいた人生を追求することによって、共同体の規範に背く行動をし、その平穏な状態に波乱を惹起する人物たちである。

また、ハーディ小説で、ある個人の存在による共同体の動揺というパターンを考える場

合、もう一つおなじみのキャラクタータイプ、つまり共同体の外部から来る他者も考慮しなければならない。その系譜は、トロイ（「遙か狂乱の群れを離れて」）、クリム（「遙か狂乱の群れを離れて」）、ファーフレー（「カスターブリッジの市長」）、アレク（「テス」）と続くだろう。彼らは農耕牧畜という田舎の共同体の伝統的職業とは異なる職業や新しい商売のやり方、あるいは教養などを身につけた新興勢力であり、途中から共同体に入ってきて物語を生成させることになる。ここで、「ジュード」においては一見そういったタイプが見当たらないことは、気にとめておかなければならない。

さて、ハーディの世界では、どんな形であれ共同体に異質の分子が出現した時、しばしばスケープゴートの儀式が出てくる。印象深いものとして、「カスターブリッジの市長」のスキミングライドによるヘンチャードとルセッタの過去暴露がある。また、古代の遺跡でのいけにえの儀式と重ね合わせられていることから、ストーンヘンジでのテスの逮捕・処刑もその一種と言えるだろう。そしてやや拡張解釈すれば、ジュードとスーのカップルの社会による迫害などもそれに相当する。

そこで注目しなければならないのは、ハーディが、生物に関して、人間の共同体も含めたあらゆるレベルで、集合体となると性質が変容し、全く別の一人格のようなものになってしまうという事実非常にこだわっていることである。次は「遙か狂乱の群れを離れて」からの引用である。

のろのろと歩く人たちからなる行列全体が、意志のある完全なバランスをもって進んでいた。その様子は、他の部分にはっきり別々に組織化されているのに、集合全体では共通の意志をもつチェーン・サルパという名で知られている珍しい生物と似ている。<sup>1</sup>

ここでは人々の集合が、チェーン・サルパという生物に例えられながら、集合を構成する個々の個性とは別の一人格になることが示唆されている。「テス」では、林の中で苦しむキジの描写をしたあと、集団でキジを惨殺した人たちのことを次のように評している。

その時、彼らは、粗野で残忍に見えたけれども、一年中そういうわけではなく、実際は、秋と冬の数週間以外は全く礼儀正しい人たちである。<sup>2</sup>

ハーディは、生物が集合体となると性質が変容し、残忍性が急激に高まることに注目しており、そして、人間社会のスケープゴート儀式、つまり集団を作って他者の印をつけたものを残虐に排除することも、それと類似の振る舞いと見なしているようである。「カスターブリッジの市長」の、スキミングライドによるショックでルセッタが死亡した時の語り手のコメントは次のようなものだった。

結果は悲惨だったものの、種々雑多な人が参加した行列を計画した無思慮な連中も、決してそんな結果を予期したり意図したりしていたわけではなかった。ここはひとつ、町のことを仕切っている人たちを赤面させてやろうというワクワクする見通しだけが・・・彼らを駆り立てたのであった。<sup>3</sup>

また、ここにも多少伺われるが、ハーディ小説のスケープゴート儀式の描写には、共同体に突出した存在が発生した時、集団がその排除作用を行うことを、自然に生じるやむを得ない現象として是認するようなコメントが添えられることが多い。そして、その主要人物たちの悲劇の原因の解釈がしばしば決定不能に陥る一つの理由は、ハーディが、オリジナルな生き方を追求する個人やカップルに強いシンパシーを示しながらも、また一方で、オリジナリティを排除しようとする人間の集団行動を自然現象の一部と見なし、加害者となった個々人を無罪放免にしてしまうことにあるのだ。

ここまで、人間の物語が生物学的事実の延長線上に捉えられているということを、空間軸のレベルで見てきたのだが、時間軸についても検討してみたい。ここでいう時間軸における生物学的事実とは、遺伝のことである。小説中、遺伝的特質が特に問題になっている人物の流れを辿ってみると、ボールドウッド（「遙か狂乱の群れを離れて」）、ユースティシア（「帰郷」）、ヘンチャード（「カスターブリッジの市長」）、テス（「テス」）、ジュードとスー（「ジュード」）という系譜ができあがるだろう。次に、ボールドウッドの狂気の行動をモチーフとして継承していく人物を各作品で並べてみると、ボールドウッド（「遙か狂乱の群れを離れて」）、ユースティシア（「帰郷」）、ヘンチャード（「カスターブリッジの市長」）、テス（「テス」）、ファザータイム（「ジュード」）という流れになる。このことから分かるのは、「ジュード」を除いた各作品においては、狂気あるいは常軌を逸した行動が遺伝という事実と直接的に関連づけられているということである。次はそれぞれ「遙か狂乱の群れを離れて」「帰郷」「カスターブリッジの市長」からの一コマである。

「ああ、コーガン、ボールドウッドさんの家系に狂気が現れたことがあるかどうか知っていますか？」とトロイは言った。

「ボールドウッドの叔父さんが頭がおかしかったという話は一度聞いたことがあります。」（「遙か狂乱の群れを離れて」(213)）

「でも多分、私が憂鬱な気分になるのはあなたのせいではないのだから。」と、彼女はいたずらっぽくつけ加えた。「そのように感じてしまうのは、私の性質の中にあるのだから。生まれつき、私の血の中にあつたんだと思うわ。」<sup>4</sup>

温和な薄い表面の下に激しい気性が隠されていた — 約20年前、・・・、妻を追放したあの気性が。(「カスターブリッジの市長」(54))

人間の共同体と生物の集合体が同質の振る舞いを示すように、個人は家系に流れる血・ジェネレーションという、いわば時間軸の集合体と同質の振る舞いをするのである。多少荒っぽくまとめてみると、空間軸においても時間軸においても、人間の物語が生物学的事実を重ねてくるのである。

ここで、「ジュード」のそれまでの小説とは異なる特異性をもう一度確認しておこう。一つは、「ジュード」には、共同体の外側から来る新興勢力、共同体を大きく揺るがすものとしての他者が見当たらないこと。そしてもう一つは、「ジュード」では、狂気の行動が、少なくとも直接的には、遺伝と結びつけられていないことである。「ジュード」の場合、主に「遺伝」は、個人の狂気というよりも、フォーレイ家の人たちの結婚の失敗という人間の物語レベルと関連づけられている。フォーレイ家の家系の遺伝により、ジュードとスーの悲惨に終わる物語が、ジュードの叔母によって確信をもって予見されている。

もちろん、FTの病的な敏感さが、他の生物の苦しみに対する異常な感受性を持っていたジュードの性質が遺伝し、さらに発達してしまったもの、という見方も成り立つかもしれない。しかしそれは、ボールドウッドやユースティシアのように、過去の世代から各個人に代々発症してしまう病気のようなものとは異なり、むしろ進化の果てに新しく現れた異常行動のように描かれている。

また遺伝と言え、あれほどはっきりと遺伝がモチーフになっている「恋の霊」でも、その狂気との関係は特に見受けられないことも考えあわせると、ハーディの遺伝の扱い方が、後の方で変化してきている可能性が伺えるのである。実はそのターニングポイントは、「テス」のエンジェルがテスからアレク殺害の告白を受けた場面での、エンジェルの心の中の思いにみられる。ここでエンジェルは、テスの殺人という錯乱行為をまず、血＝遺伝に結びつけるのであるが、その直後違う発想が頭に閃くことに注目したい。

クレアは、ダーバヴィル家の血に潜むいかなる暗い気質が、こんな常軌を逸した錯乱行為に走らせたのだらうと思った。その時、瞬間的に彼の頭にひらめいた。ダーバヴィル一族の者がこういうことをやりかねないと知られていたからこそ、公式馬車の殺人事件というあの家系の伝説が生まれたのではないか、ということが。(「テス」(362))

ここに見られる発想は、まず、ダーバヴィルの性質ならやりかねない、という印象や予感が人々の間に伝説・物語を生み、そしてダーバヴィルの末裔が具体的にその物語を、差異を伴いながらも反復してしまうという発想である。いわば、ジュードとスーのそれぞれ

の結婚の失敗も、フォーレイ家にまつわる物語の反復と読むことができ、「ジュード」の前作「テス」あたりから、遺伝のテーマは単純に狂気と関連づけられることを越えて、物語・伝説の生成と反復というテーマとリンクしてることが分かる。

ハーディは、空間軸では生物の集合性を、時間軸では生物学的遺伝の事実を、それぞれ人間の物語に大胆に拡張適用している。それも、以前はその発想をコメントや挿話のレベルで表していたのが、「テス」や「ジュード」では、物語全体でその発想の証明となるような重みを持つように作っているのだ。

そしてFTの常軌を逸した殺人と自殺は、ジュードから受け継いだ過敏な神経の進化という時間軸の要因に、空間軸の要因がやはり絡まっている。

多すぎるのでやりました。<sup>5</sup>

FTの殺人及び自殺には、人口過多になると充分食料が行き渡らないので誰かが犠牲にならないといけない、という単純なマルサスの発想が基にあり、さらにその犠牲を自分たちが引き受けるという趣旨が見られる。同じ発想はテスにもうかがわれる。

テスは、考えもなく妹や弟をそんなに多く産み落とすことで、母親に対し全くマルサス的に感じるのだった。彼らを育て食べさせていくのも大変だというのに。(「テス」(55))

最後に自ら死を選ぶテスにも、実は、ポールドウッドとFTを結びつけた「殺人」「狂気」「自殺」というキーワードが、そのまま当てはまっているのだが、テスとFTの場合、ポールドウッドとは異なり、人類全体を視野に入れ、自己犠牲を選ぶというコンセプトが含まれている。

人口の増大、すなわち、人種の肥大化が進むと、現代の進化論者ジェイ・グールドの発想とタームを用いれば、どこかで気まぐれな種分化の段階が訪れるはずである。ハーディのテキストには、この未来の自然な種分化という発想に類似したものが見られる。将来の人類が、現存の制度やイデオロギーではなく、気質というむしろ生物学的特性によって分かれていくのを望む考えを、ハーディ自身表明している。

私は、個人の自発性を基礎とした社会システムの方が、あらゆる気質の人が一つの生活パターンに合わせなければならないような統制された一様な社会システムより、より幸福をもたらす見込みが大きいと考える。私ならこの目的のために、同じ気質を持った人の集団に社会を分割するだろう・・・<sup>6</sup>

また、別れを懇願し結婚制度についてフィロットソンに不満をぶつけているスーのコメントにも、それと似たような考え方が伺える。

でも本当にお願いです！家庭についての法律は気質に応じて作られるべきだし、その気質というものも分類されるべきものなのよ。（「ジュード」(187)）

さらに、「テス」のエンジェルが搾乳場で、牧場の人たちがいかに多くの多様性を内包しているのかに気づく場面を見ると、

多様性が単調さにとって変わった。親方とその一家、その下で働く男衆や娘たちは……差異を生じ始めた。……多くの多種多様な人間に分解してしまった。（「テス」(130)）

このように、後期のハーディ小説には、自発的な多様化ということに、ことさら肯定的な価値を付与している描写が目立つのである。つけ加えるならば、「ジュード」でも主人公が、町の人たちの生活の方が大学の中よりはるかに脈動し変化に富んでいると実感している場面なども思い浮かぶだろう。

このような自然に生じる種分化にしたがったグループ分けが人間においても良しとするハーディの考え方から、一律の制度やイデオロギーによる集団の人工的な統合から生じる問題点を告発するという、多くのハーディ小説の重要なテーマが生じてくる。そして、結婚や大学の制度に苦しむスーとジュードの姿は、まさにそのテーマを具体的な形で訴えていると言えるだろう。では気質といういわば生物学的資質のレベルで異なっている多くの個人を、法律・制度・道徳などで束ねたまま人類が膨張していくと、最終的には何が起きるのか？従来「ジュード」批評であまり指摘されてこなかった点だが、「ジュード」にはその問いかけも含まれているように思われる。その答が実は、人間特有の空間軸・時間軸の不自然な拡張、つまり、人類の膨張と神経過敏の進化が行き着く果てに出現したようなFT、による自己破壊行動なのではないだろうか。そして「ジュード」における他者とは、人類の内側から現れた他者、つまり怪物FTだったのではないだろうか。そしてさらに、スーがFTの事件によるショックによって180度変節してしまったのは、スーの新しい生き方や異教主義追究の試みが、せいぜい限定された時代や社会の、規範・道徳・宗教に対する挑戦にすぎず、人類の内側から生じた人類にとっての他者には全く無力だった、ということを示しているのではないのだろうか。

ボールドウッドの導入でハーディ的小説世界が始まり、FTの出現と退場がハーディ小説の終焉を導いたと捉えてみる。ボールドウッドの狂気によって生じた混乱の後、パスシバには静かな生活を得る場所が残った。しかし、FTの狂気によって引き起こされた悲劇の後

に残ったものは、作中でエドリン夫人が「葬式」と形容しているスーとフィロットソンの結合であり、その「葬式」は人類の死をシンボリックに暗示したものなのかもしれない。

本来自然に多様化に向かうはずの内部の圧力を、解放しないまま膨張すると、人類は内部から神経の化け物が出現しやがて自己破壊に向かっていく、それが人類の進みゆく方向であるとハーディが予感し、その予感をFTの荒唐無稽な伝説にしたのだとしたら、それはまさに、ダーバヴィルについての予感から人々が荒唐無稽な伝説をしたことと同じ身振りである。ダーバヴィルの物語を、後にテスが反復したように、FTの物語を後の人類が反復する、あるいは局所的にはすでに、多様な差異を伴いながら反復している具体的な現実がないとは、誰にも言えないであろう。

[本稿は、1999年10月30日の日本ハーディ協会第42回大会(於：東京女子大学)において行った口頭発表原稿に加筆・修正を加えたものである。]

#### 注

- 1 Thomas Hardy, *Far from the Maddening Crowd*, The New Wessex Edition (London: Macmillan, 1974), p.85 以下本作品に関する引用はこの版からのものであり、括弧内の数字はページ数を示す。
- 2 Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles: A Pure Woman*, The New Wessex Edition (London: Macmillan, 1974), p.268 以下本作品に関する引用はこの版からのものであり、括弧内の数字はページ数を示す。
- 3 Thomas Hardy, *The Mayor of Casterbridge*, The New Wessex Edition (London: Macmillan, 1974), p.259 以下本作品に関する引用はこの版からのものであり、括弧内の数字はページ数を示す。
- 4 Thomas Hardy, *The Return of the Native*, The New Wessex Edition (London: Macmillan, 1974), p.79 以下本作品に関する引用はこの版からのものであり、括弧内の数字はページ数を示す。
- 5 Thomas Hardy, *Jude the Obscure*, The New Wessex Edition (London: Macmillan, 1974), p.286 以下本作品に関する引用はこの版からのものであり、括弧内の数字はページ数を示す。
- 6 Florence Emily Hardy, *The Life of Thomas Hardy, 1840-1928* (London: Macmillan, 1962), p.258